

1 1	海部	弥富市立 弥生小学校	アツミ ヒロコ 渥美 緋呂子
分科会番号	1 2	分科会名	自治的諸活動と生活指導（小学校）

研究題目

自他を認め、よりよい生活や人間関係を築こうとする児童の育成
 ― 自他の強みの認識や、その活用を目指す実践を通して ―

研究要項

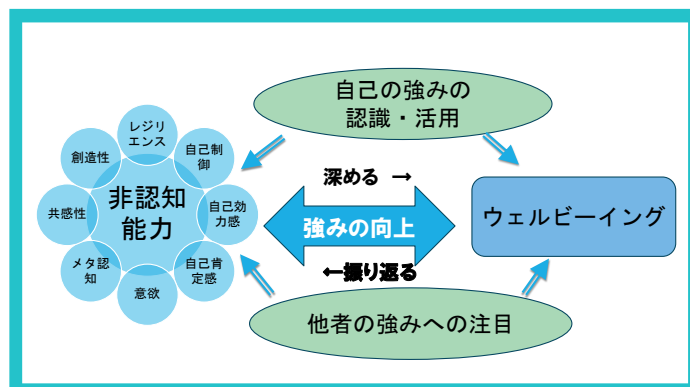
1 主題設定の理由

令和5年6月16日に閣議決定された「第4期教育振興基本計画」は、日本社会に根差したウェルビーイングの向上を目指し、教育政策全体の方向性や目標を示している。ウェルビーイングとは、身体的・精神的・社会的な面で全てが良好な状態にあることを意味し、短期的な幸福だけでなく、生きがいや人生の意義など、持続的な幸福を含む概念として定義される。ウェルビーイングの向上は、学校教育法施行規則に定める特別活動の標準授業時数内の取組で成果の出るものではなく、学校教育活動のあらゆる場面で、取組を推進する必要がある。小学校段階は、子どもたちの人格形成や社会性の基礎が築かれる重要な時期であり、この時期に自己肯定感、レジリエンス、共感性などの非認知能力を育成することや、自分の「強み」を生かしてポジティブに毎日を送る力を育むことは、子どもたちが変化の激しい社会を生き抜き、幸福な人生を送るために不可欠である。

昨年度まで本校では、非認知能力とウェルビーイングの関連性について研究を行った。特別活動の枠組みにとらわれず、学校教育活動全体で児童のウェルビーイングを向上させる取組を実践した結果、児童の非認知能力を高め、ウェルビーイングの向上につなげることができた。

本年度から改めて、「強み」の認識・活用に焦点をあて、児童の非認知能力やウェルビーイングの向上を目指す。「強み」とは、人間が活躍したり、最善を尽くすことを可能にさせたりする特性を指す。すべての人間には強みが内在し、自己の強みを認識したり、強みを生活に生かす方法を考え出したりすることで、自信や自尊心、幸福感などの高まりが期待できる。本研究の共同研究者である、一般社団法人ポジティブ・コーチング心理学実践研究所長石川利江先生、桜美林大学山口有香先生により、強みの認識や活用は、自己肯定感や共感性などの非認知能力の育成に有効な手だてとなり得るとの助言があった。非認知能力とウェルビーイングは密接に関連しているため、強みに注目した取組を実践することは、本校が目指す児童像の実現に資する取組と考える。

以上を踏まえ本研究では、強みの育成・介入により、自他の強みの認識や活用に基づいた非認知能力の育成と、ウェルビーイングの向上を目指す【図1】。児童が自身の強みに気づき、それを活用する取組や異学年交流活動を通して、身に付けた強みを学校生活の各場面で発揮できるような実践を行う。それにより、自他を認め、よりよい生活や人間関係を築こうとする児童の育成を目指す。



【図1 研究の構想】

2 研究のねらい

(1) めざす児童像

自他のよさや強みを認め、仲間とつながり、協働できる喜びを感じる児童

(2) 研究の仮説

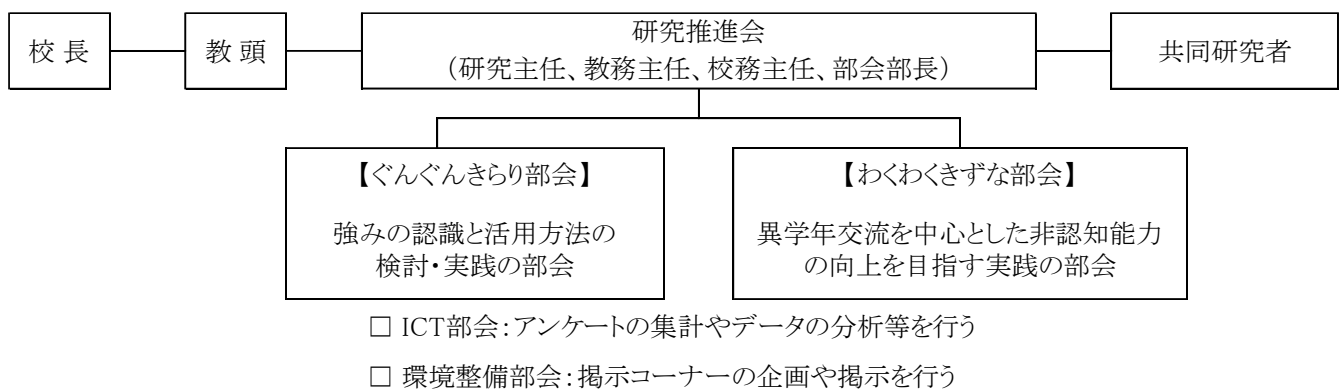
仮説1 自己の強みを認識し、それを活用するために必要な資質を養うことで、自己と他者の関係を調整し、協働できる喜びを感じることができよう。

仮説2 特別活動とその他の学校教育活動を関連付けた取組を実践することで、特別活動で身に付けた力をあらゆる場面で活用する児童が育つだろう。

3 研究の対象

全学年（511名）

4 研究の組織



5 研究の方法

(1) 仮説に対する手だて

① 仮説1に対して

ア 自己の強みを認識し、強みを生かした取組の工夫をする。

イ ウェルビーイング向上支援プログラム【図2】を継続し、児童の発達段階に応じて、他者の多様な考えやよさを認め合い、自分の考えを再考する振り返り活動を設定する。

② 仮説2に対して

ア 異学年交流活動を充実させ、年間を通して実践する。

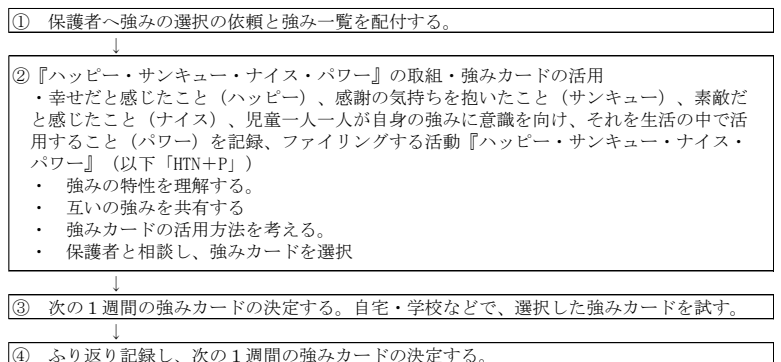
イ 児童に獲得を期待する非認知能力の育成と、特別活動で身に付けた強みを活用する。

(2) 仮説の検証

① 授業記録

② しあわせさがしアンケートの分析

③ きずなタイム振り返りアンケートの分析



* 以下、③・④のくり返し

【図2 ウェルビーイング向上支援プログラム】

6 研究の実践

支援学級の実践 自立活動「七夕まめ太」 【手だて①ーア】

(1) 授業の実践

① ねらい

親しんでいる「24 の強みのまめ太」の活用の仕方を工夫することで、日々の生活に強みを生かそうとする心を養う子どもを育成する。

② 活動の実際

七夕にちなんだレクリエーションをいろいろと考えていた子どもたちのアイデアから、「七夕まめ太」を学級の皆で作ることにした【資料1】。さらに、短冊作りには、「〇〇のまめ太と一緒に□□して、◇◇をしたい」という形にして、強みを意識させた。

きずなフェスでは高学年の応援のかけ声が周囲に広がり、皆で力いっぱい応援できたことが楽しいと感じた児童は、「リーダーシップのまめ太と一緒に次のきずなフェスで同じ組を応援して、1位になりたい」と書いた。家で花を育てている話をよくしている児童は、「美しいものを感じる力のまめ太と一緒にひまわりに水をあげて、大きくきれいな花をさかせたい」と書いた【資料2】。

③ 考察

24 の強みのまめ太を星形にし、それをカードにして貼った短冊に願いを込めて書いたことで、わくわくするような日々を自分で作り出すことができるかもと意欲と創造性を感じることができた。強みを生かそうとする心のもちようの一つになったと考える。



支援学級の実践 「HTNでパワーをためよう」 【手だて①ーイ】

(1) 授業の実践

① ねらい

自分のもつ強みをより意識できるような工夫を考えることで、自分の強みを生かしより豊かな生活を送ることができたり、強みのまめ太を通して自分とは違うよさをもつ友達と関わり合いたいと思うことができたりするような子どもを育成する。

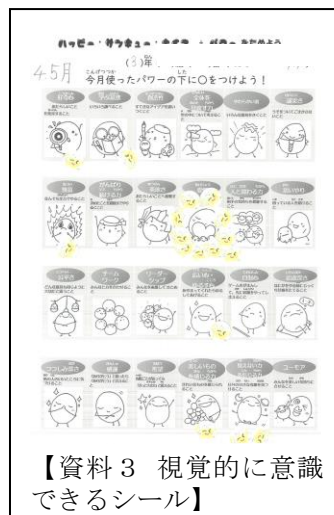
② 活動の実際

24 の強みのまめ太のシールを活用し、視覚から自分の強みを意識できるよう教室にコーナーを設けて掲示した。シールは2種類、用意した。一人一人が描いた丸型のシールと、もう一つは24の強みのまめ太をシールにしたものを一枚のシートにして、一人ずつに渡した。このシールは、これまでの強みのまめ太を使ったのかが分かるよう、24枚のクローバーの葉に貼ることができるようにした。

児童は丸型のシールを貼るとき、「ぼく、愛情のまめ太が好き」と、はにかんだ様子で気に入っているまめ太の話をした。愛情のまめ太にシールを貼れたことや、たくさんのシールで囲まれているのを見て喜んだ【資料3】。また、友達のクローバーにまめ太のシールが増えていることに気付くようになると、まだシールの貼っていない強みを見つけるようになり、クローバーに貼った強みのまめ太のシールが増えていった【資料4】。

③ 考察

自分のもつ強みがシールを貼ったことで視覚的によく分かった子どもは、今までは気がつかなかった自分の強みや自己肯定感を、日々の生活にあるHTNな出来事の中に見つけることができた。また、友達のもつ強みや共感性にも目を向け、感じたことを伝え合うようになった。



【資料3 視覚的に意識できるシール】



【資料4 クローバーに貼られたシール】

2年生・5年生の実践「HTN+Pとやよいきずなフェスのふりかえりすごろく」【手だて ②ーア】

(1) 実践の内容

① ねらい

やよいきずなフェスでのペア学年の取組と、毎週のHTN+Pを往還し、自分の強みを他者へ伝え協働できる喜びを感じることができる。

② 活動の様子

やよいきずなフェスの競技は、ペア学年合同で実施し、練習から同じ目標に向かって練習を重ねたことにより、ペア学年同士の絆が深まった。学校全体としてもきずな班への仲間意識が高まった。フェスのエピソードをHTN+Pに記入した児童が多く、記入内容を活用し授業を展開した。記入したエピソードからすごろくを作成した【資料5】。

個人のすごろくを持ち寄り、2年と5年のペア学年で取り組んだデカパン競争や障害物リレー、全校で取り組んだ大玉送りを想起し、一枚の画用紙を一マスにして、大きいすごろくを作成した。

「障害物で思いやりパワーを使ってゴールまで行けた。ナイス！思いやりまめ太まで進む」「頑張りが続けた力で、デカパンで走れた。ハッピー！3マス進む」などユーモアを交えて表現する姿が見られ、創造的な思考が育まれた。書くことが苦手な児童も、競技を共にしたペア学年児童が近くにいることで、安心して活動することができた【資料6】。その後、体育館で完成したすごろくを、きずな班に分かれて楽しんだ。そこでは、互いのエピソードを共有しながら話し合ったり、笑い合ったり共感したりする姿が見られた【資料7】。



【資料5 完成したオリジナルすごろく】

コースやマス目を話し合い、伝え合いながらすごろくを並べ、ゲームを行った。5年生が声をかけて、2年生の緊張をほぐ



【資料6 2年生・5年生でコマを考える】



【資料7 話しながら作った巨大すごろく】

し、協働する姿が見られた。2年生が自分の意見だけを主張しそうになったときは、周囲の声を聞くよう促す声かけも見られた。

③ 考察

継続して関わったことで、きずな班での関わりを楽しむことができるようになったと感じた。すごろくのマス目を作る際には、「熱意のパワーを使って、はやく作り終え、5年生と遊んで1番にゴールにつきたい」【資料8】など他者の感覚を知ること、自分とは異なる視点に気づき、仲間づくりやコミュニケーションの力にもつながった。「学ぶ意欲を使って、いろいろ考えて、みんなが『楽しい』と思うすごろくが作れた」と子ども同士で、強みを伝え合う姿も見られるようになった。「創造性を使えたから、いろいろなアイデアを思いついた。5年生になったから、リーダーシップを使ってきずな班の2年生と楽しく1番になりたい」と自己効力感の高まりも見られた【資料9】。さらに学級内でも、優しい声かけや気遣いをしながら、グループでの活動ができるようになり、メタ認知が高まったと考えられる。

今日、なかよしになれたまめは？
つぎ、このまめたといっしょに なにをしたい？

①ねついのパワーをつかってはやくつくりおわって5年生とあそんで、1は"んめ"にゴ"ブル"につきたい。②こうきんみんなとたのしくけんすろくのやでもいろいろな、けんをいであそぶ。

【資料8 作り終えた後の児童の振り返り】

今日のすごろくをやって③そうそうせいをつかえたからいろいろなアイデアがあおもいついたからあと3年たったら5年生いになら④リーダーシップをつかってきずなはんの2年生とたのしく1は"んめ"になりたいです。

【資料9 体育館での活動後の振り返り】

全校取組の実践 「やよいっ子きずなタイム」 【手だて②ーイ】

(1) 実践の内容

① ねらい

異学年交流活動を計画的に実践することで、他者との関わり合い、協働しながら、自己肯定感、意欲、メタ認知、自己制御、創造性、レジリエンス、共感性、自己効力感の非認知能力を高める。また、これらの活動の中で、特別活動で身に付けた強みを活用することができる。

② 活動の実際

本校では、「やよいっ子きずなタイム」（以下きずなタイム）という異学年交流活動を行っている。きずなタイムは、1年生から6年生までの異学年集団で構成された「きずな班」で行っている。きずなタイムの活動例は下記のとおりである。

やよいっ子きずなタイムの内容（一部）

- ・あそびの会 … きずな班単位で運動遊びや制作活動、音楽的な活動に取り組む
- ・やよいきずなフェス … 異学年交流活動として運動会種目に取り組む

- ・学校ピクニック … きずな班でお弁当を一緒に食べる
- ・異学年交流学習 … 異学年の児童が日常の学習活動の中で交流する

今年度は5月に「やよいきずなフェス」と「学校ピクニック」、6月に第1回の「あそびの会」を実施した。4・6年生の体育科などで異学年交流学習も行った。「やよいきずなフェス」「あそびの会」実施後には児童一人一人にアンケート調査を行った。アンケートの内容は、非認知能力に関する選択回答形式の質問と、児童それぞれの感想を自由回答形式で答えさせるものとした。

ウ 考察

どのきずなタイムにおいても、それぞれの班で異学年交流を楽しむ様子が見られた。また高学年の児童が低学年の児童を手助けしたり、やり方を教えたりする姿が見られた。児童の感想では、他者との関わりの中でどう感じたのかを記述する児童が多くいた【資料10】。非認知能力の高まりについて記述する児童もいた。「やよいきずなフェス」の感想で児童は、大玉送りでの経験と感じたことを記述した。うまくいなくても立ち直ることができる「レジリエンス」が高まり、友達の声かけにより勇気を持つことができ「自己肯定感」も高まったと考えられる。

また、「あそびの会」のぬり絵の活動を通して、1年生と共に活動する中で「自分のことが好きになることができた」と記述した5年生の児童がいた。1年生の児童2人と一緒に花火の絵を描き、絵の具で塗り絵をし、終始、やさしく1年生に声をかけ、どのようにしたいかを聞きながら制作していた【資料11】。共にどうすればよいか考え「共感性」をもってぬり絵に取り組み、その経験を通して「自己肯定感」を高め、自分のことを好きになることができ、自信がついたと考えられる。

7 研究の成果と今後の課題

本実践では、自身の強みを生かす取組を通して、相手の立場や考えを尊重する態度を育み、本校が目指す「協働できる喜び」の育成につながった。

HTN+Pをはじめとする継続した取組により、24の強みへの理解が深まり、自分や友達のよさを認め合う姿が見られた。また、「やよいきずなフェス」や「あそびの会」などの活動を振り返り、自分が発揮した強みや今後生かしたい強みについて考えることができた。これらの特別活動と学校教育活動を関連付けた実践により、自分では気付かなかった強みを発見し、自信をもち、協働する喜びを感じる児童が増えた。

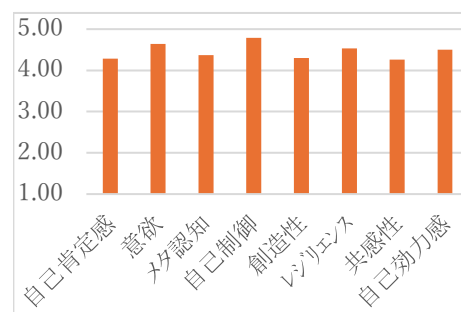
一方で、あそびの会後のアンケートから、自己肯定感の更なる向上の必要性が課題として明らかになった【資料12】。実践から、24の強みへの理解が深まっているが、アンケートでは自己肯定感に大きな変化は見られなかった。今後も、学校全体で継続的な取組を進め、自己肯定感の向上につなげていきたい。

私は全校練習の時大玉を上向きに上げるのができませんでした。でもまたあきらめるのは早いと思います。休み時間などに、と練習をして今日が本番となりすごくドキドキして「もし失敗したらどうしよう」みじかに青められるかなとどたんごんの不安をかかえていました。でもぬいさんが大玉をだぶといくれて私は、勇気を持ってすることができました。

【資料10 きずなフェスでの振り返り】



【資料11 遊びの会での「ぬりえ遊び」】



【資料12 遊びの会における強みの認知】